



編集後記

むなかた電子博物館 紀要委員会

編集長 宮川 幹平

「むなかた電子博物館紀要」が目指すべき、このむなかた電子博物館の紀要ならではのユニークな特性とは何か、紀要の編集に携わりながら、いつも思い悩むところです。技術的なアイデアはあります。電子書籍としての利便性を高めることもできるでしょう。ただ、それだけでは、この地域全体を博物館とするというユニークさを表現できていないのではないかと思います。無論、まず出来ることから始めるべきですし、そもそも電子媒体としての強みすら發揮できていない状況で何の夢物語かと思われるかもしれませんが、何かが足りない・何かをやりたいのです。そのひとつは、このむなかた地域に住まい、地域のことについてそれぞれの興味関心から学びを続けているコミュニティを相互に緩く繋ぐ役割ではないかと、漠然とではありますが、その思いを強くしているところです。つまり、それぞれの活動や成果を気軽に発表できる場であり続けるとともに、関連する話題を違う立場から気軽に話し合える場を提供するということ。全体の統括ではなく、誰でも使える対話の水飲み場を見える形で提供すること。これは紀要だけではなく、電子博物館そのもので取り組むべき課題かもしれませんが、このアイデアに限らず、市民の皆様「むなかた電子博物館、そして電子博物館紀要があって良かった」と思えるようなサービスを考え、実現していきたいと思っています。もし、一緒に紀要を作っていきたいと思っける方がいらっしゃれば、お気軽にご相談頂ければ大変嬉しく思います。なお、私は所属していた東海大学福岡短期大学の閉学に伴い、今春から神奈川に異動となりますが、今後もこの電子博物館の運営に関与していきたいと思っております。

紀要第9号発行にあたり、多くの皆さまからの御尽力を頂きました。紀要編集の立場からも、ここに改めて御礼を申し上げます。まず、特集記事に関して、月刊 J-LIS の原稿再掲載を快諾して頂いた丸井工文社様、ご担当の同社佐藤様、また、お忙しい中、座談会にご参加頂き、熱く議論頂いた海の道むなかた館関係者の皆様、マージシステム株式会社様、電子博物館運営委員会委員の皆様、そして、本紀要に興味深い論文をご投稿頂いた矢田先生、東海大学福岡短期大学の歴史を振り返る貴重なご寄稿を頂いた同短期大学学長 神山先生、そのほか、むなかた電子博物館紀要編集・発行に関わって頂いたすべての方に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。